



写真1 金剛三昧院先師墓の無縁塔

## 源氏一門墓所としての高野山金剛三昧院

### ―新発見の足利宗氏五輪塔を中心として―

木下 浩良

#### 一 はじめに

鎌倉時代に北条政子の創建になる高野山金剛三昧院は、現在も鎌倉時代初め頃と推定される国宝の多宝塔をはじめ、同じく鎌倉時代の創建とされている校倉造りの経蔵など多数の文化財を有する高野山内でも有数の古刹である。

金剛三昧院の本堂奥の南西部に位置する歴代住持を祀る先師墓には、百基程の無縁塔の石塔が集積されている（写真1参照）。その中には、江戸時代の石塔に混じって、鎌倉時代から室町時代に遡る中世の遺物が散見されることは、数年前より管見にあった。

この度、平成三十年八月に、金剛三昧院の久利康彰前官様の御厚意により同無縁塔石塔群の調査の機会を得た。その時、偶然にも鎌倉時代後期の幕府有力御家人の足利宗氏の五輪塔を発見することができた。本稿において先ずは、この新出の足利宗氏の五輪塔資料を紹介して、その五輪塔の位置づけと、その背景にあるものは何か。若干ではあるが考察を述べたい。

また、この度発見の足利宗氏の五輪塔は、金剛三昧院の寺院としての性格を論じる上でも新知見を示すものと考えられる。それは、表題にも記したように、金剛三昧院が広義の意味で「源氏一門の墓所」ではなかったか、ということである。この点についても、検討をしてみたい。大方の御示教等頂ければ幸いである。

## 二 足利宗氏の五輪塔

足利宗氏の五輪塔は砂岩製である。一見すると、地・水・火・風・空の各輪が揃っているように見えるが、詳細に見ると地輪と水輪だけが造立当初のもので、他の部分は転用の部材である。火輪は石材が違う花崗岩製で、造られた時代は足利宗氏の五輪塔とは若干時代が下るもので、鎌倉時代末から南北朝時代の遺品と推定される。空・風輪は一石で出来ていて、時代はさらに下り、室町時代の遺物と推定される。火輪と空・風輪は、別個体の別物であることを示している。現状は、地輪と水輪のみの残欠品である（写真2・実測図1参照）。

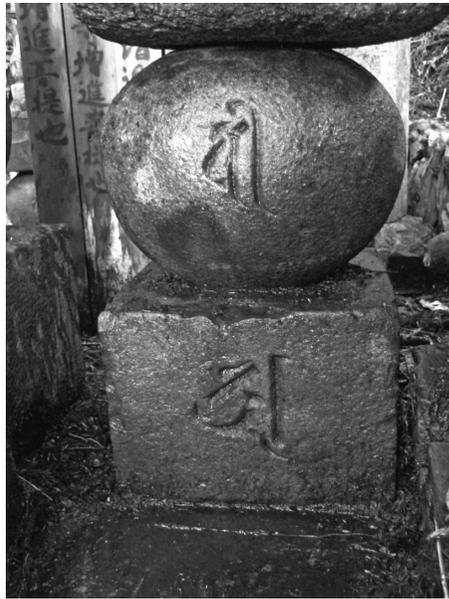
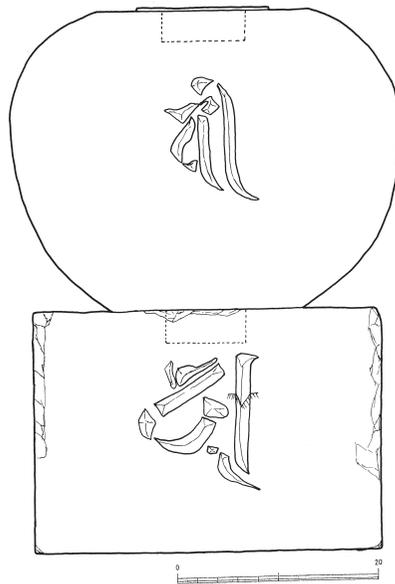


写真2 足利宗氏の五輪塔



実測図1 足利宗氏の五輪塔実測図

地輪と水輪の各輪の法量は、次のようである。地輪の高さ二四・六cm、幅三四・六cm。地輪の上端中央には水輪の底部を受けするための径八・六cm、深さ三・五cmの円形の柄孔をうがつ。水輪の法量は高さ三〇cm、上端径二二cm、最大径三九cm、下端径一九cm。水輪の上端には高さ〇・二cm、幅二・四cm、径一八cmの円形座の柄を造り、その中央には口径八・二cm、深さ三・二cmの円形の



写真3 水輪上端の円形座柄と納入孔



写真4 水輪底部の柄の跡と地輪上端の柄孔

納入孔を造る（写真3参照）。現在は、納入品は失われている。柄跡の径は8cmである（写真4参照）。  
水輪の底部には柄の跡が認められるものの、柄そのものは欠損

次に刻された梵字であるが、地輪の正面には、大きく葉研彫された梵字の「ア」、水輪にも大きく葉研彫した梵字の「ビ」を陰刻する。これにより、五輪塔造立当初は、大日如来の報身真言の「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」が刻されていたことが分かる。梵字だけを見ても鎌倉時代の遺物と判断される。それほど、梵字は優美な書体である。地輪の正面向かって左側面には、次のような陰刻銘文が四行にわたり刻されている（写真5・銘文拓影参照）。

奉為足利

又三郎殿成佛

得道造立之

正和元年十二月日



写真5 地輪銘文面



銘文拓影

銘文に刻された「足利又三郎」こそ、「足利宗氏」のことである。足利宗氏は、足利宗家（斯波）の嫡男で、南北朝時代の有力武将である斯波高経・家兼兄弟の父にあたる。銘文により、金剛三昧院で発見された五輪塔は、その足利宗氏の成仏得道のために造立された石塔と知られる。鎌倉時代後期の正和元年（一三二二）十二月の紀年銘を刻している。

鎌倉時代の高野山の五輪塔の形状は、地輪・水輪・火輪・風輪・空輪を一石で造る一石彫成五輪塔、地・水輪を一石で造って火・風・空輪を一石で造る二石彫成五輪塔、地輪を一石、水輪を一石、火・風・空輪を一石で造る三石彫成五輪塔、地輪を一石、水輪を一石、火・風輪を一石、空輪を一石で造った四石彫成五輪塔、地輪と水輪と火輪の各輪を一石で造り、風・空輪を一石で造った四石彫成五輪塔の五種に分けられる。今回発見の足利宗氏の五輪塔の造立当初の形態は、上記の三石彫成五輪塔か、あるいは四石彫成五輪塔であったことが考えられる。

次に、足利宗氏の五輪塔の水輪上部の納入孔に、何が納められていたのが問題となる。ここで参考になるのが、高野山における同時期の五輪塔である。同様に水輪上部に円形座柄を造りだして、さらにその柄の内部に円筒形に納入孔を造る五輪塔は高野山の鎌倉時代の五輪塔において、まま見られるものである。その一例として挙げられるのが、高野山奥之院に遺存する、嘉元三年（一三〇五）五輪塔である。完形の五輪塔で、地・水輪を一石で造って火・風・空輪を一石で造る二石彫成五輪塔である。水輪の上部には円形座柄と納入孔を造る。現在はこの五輪塔も納入品は失われているが、その五輪塔の銘文には次のように刻されている（実測図2参照）。

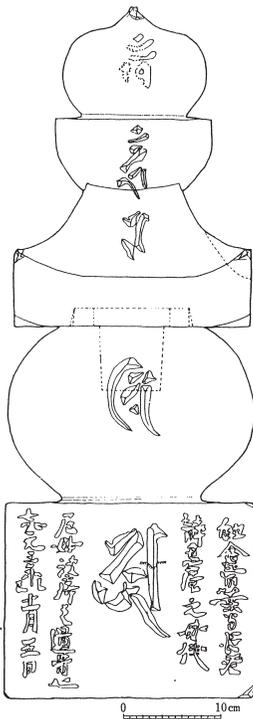
鎌倉常華寺長老

静忍房之母儀

（梵字：ア）

尼妙波房之遺骨也

嘉元三年乙 十一月五日

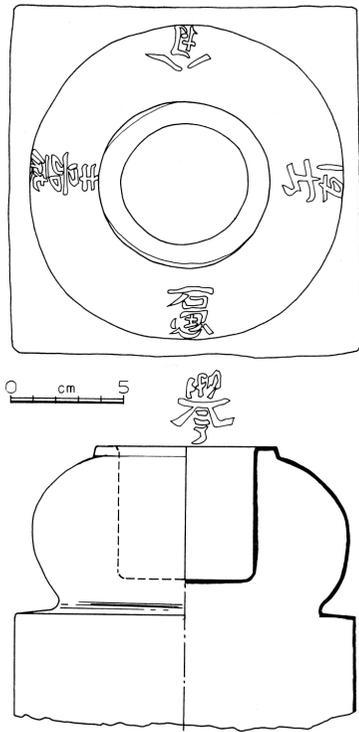


実測図2  
嘉元3年(1305)  
五輪塔実測図

まさに、銘文にある「遺骨」を納めたのが五輪塔に造り出された円形座柄とその内部に造られた納入孔と考えられる。<sup>(註2)</sup> 足利宗氏の遺骨も同様に、水輪の納入孔に納められたものと考ええる。

この嘉元三年(一三〇五)の事例の他にも、これまで高野山奥之院で出土した五輪塔の中で、水輪の納入孔に火葬骨を充填した遺物が見出だされている。それが、昭和三十七年から同三十九年にかけて行われた奥之院燈籠堂と御所芝周辺の改築・修復工事の折に出土した五輪塔である。この時、火葬骨の地層をはじめ、納骨器・燈明皿・古銭・鏡・銅仏像・泥仏・経筒とおびただしい量の石塔が現れた。その中の二基の五輪塔には水輪上部に納入孔があり、孔の中には火葬骨が充填していた。<sup>(註3)</sup> この二基の五輪塔の造立年代は明らかにされていないが、その後の報告を参照すると、<sup>(註4)</sup> 砂岩製で地・水輪一石で水輪の上端に円形座柄がある、嘉暦二年(一三二七)在銘品と思われる(実測図3参照)。銘文は地・水輪の四面にかけて次のように陰刻されていた。「石思道誉、嘉暦二年、八月十二日、午剋逝」。

円形座柄に守られた納入孔には、足利宗氏の遺骨(おそらく火葬骨)が五輪塔造立当初には納められていたものと推測する。足利宗氏の五輪塔の形状も、紀年銘にあるように鎌倉時代の正和元年(一二三二)の頃のものに間違いない。



実測図3  
嘉暦2年(1327)五輪塔実測図  
(『高野山奥之院の地寶』より転載)

### 三 足利宗氏の没年と鎌倉末期の斯波氏

さらに、足利宗氏の五輪塔から注目されることが、足利宗氏の没年についてである。これまで足利宗氏の没年については不明とされていたが、本五輪塔の銘文により、「正和元年（一一三一二）十二月」が没年月である可能性が出た。石塔の紀年銘は、実際に造立した時と、被供養者の没年を示すものに大きく分かれる。年忌供養にこの金剛三昧院の五輪塔が造立されたとしても、本五輪塔が造立された、正和元年（一一三一二）十二月の時点で足利宗氏は故人であったことは明白である。本稿においては、五輪塔に刻された正和元年（一一三一二）十二月が足利宗氏の没年月であることと、宗氏が供養された時を示したものの二つの可能性を明示したい。

足利宗氏は足利一門の斯波氏の三代目にあたる武将であった。斯波氏の初代は足利家氏、二代目が足利宗家である。斯波氏は、南北朝時代から室町時代にかけて、足利一門の中でも特に名族として幕府政治の重きをなした。「斯波」を名乗るのは、南北朝時代の頃からで、鎌倉時代は「足利」を称していた。

この足利宗氏については、小川信氏による詳細な先行研究がある。<sup>註5</sup>その小川氏の研究成果によると、足利宗氏の名が史料上に出るのは、正慶元年（一一三三二）九月二十三日付と同年十一月二日付の二通の「関東裁許状案」〔『朽木文書』〕である。この史料は、越中国岡成名の所有をめぐって、佐々木（朽木）義綱の長男時経と岡成景光の子景治・孫友景との間などで行われた相論を裁決したものである。

その『朽木文書』によると、岡成名は元、「足利尾張三郎宗家」の所有であった。この史料には宗家の子息の足利宗氏が幕府の尋問に応じて、延慶二年（一一三〇九）三月二十九日付で提出した以下のような請文が引用されている。なお、本史料では、「足利又三郎宗氏」と仮名と実名を明記している。

（史料一）正慶元年（一一三三二）九月二十三日付北条茂時・赤橋守時連署関東裁許状案（朽木文書一四九）

随相尋之足利又三郎宗氏宗家息之處、延慶二年三月廿九日請文者、岡成名父祖領知事、承久兵乱之比、地頭・名主大略帰遠江守

朝時<sup>(北条)</sup>之刻、安貞年中各以所領令寄附、即可補代官職之旨、就望申安堵訖、所務之次第為治息代、賜宛文、濟年貢畢、宛身依不領掌、不帶証状云々

これにより、岡成名は名越朝時の地頭職領有に由来することがわかる。朝時の女であった足利家氏の生母を経て家氏の子の宗家の所有となり、さらにその子の宗氏の所有となったことが明らかとなる。

この関東裁許状が引用する足利宗氏の請文により、延慶二年(一三〇九)までに父宗家は死去していて、宗氏が当主になったことがわかる。ただ、宗氏の生涯については不明な点が多い。宗氏は武将としてではなく、むしろ歌人としてその名が見られる。『続後拾遺集』『新千載集』などに、宗氏の歌が撰録されている。元亨三年(一三三三)十二月の北条貞時の十三回忌供養の時に、宗氏の跡を継いだ高経が参加しているために(『円覚寺文書』「北条貞時十三年忌供養記」、従来の説では同年までには宗氏は死亡していたのではないかとされていた。

今回、宗氏の正和元年(一三一一)五輪塔が発見されたことにより、先に紹介の延慶二年(一三〇九)三月二十九日請文と合わせて考察すると、宗氏が当主だった期間は、延慶二年(一三〇九)頃から正和元年(一三一一)までの、僅かに四年ほどであったことが推測される。

また、高経の生年は嘉元三年(一三〇五)とされるので、高経<sup>(注6)</sup>が宗氏の跡を継いで当主となったのは弱冠八歳の時と、これも五輪塔に刻された、正和元年(一三一一)紀年銘から逆算して分かることである。

今回の足利宗氏の五輪塔の発見に関連して、宗氏に連なる系譜についても、若干ではあるが触れてみたい。図版1は『尊卑分脈』により作成した足利宗氏関係の系図である。問題は、宗家と宗氏の間、家貞なる人物がいて、宗氏の跡を継いだのはその家貞の子の高経という点である。『尊卑分脈』では、家貞は「尾張二郎」と称していたとして「早世」とする。また、家貞は「本名宗氏」とも『尊卑分脈』では注記されている(ただし、一部の写本には、この注記は見えない)。これにより、これまで家貞と宗氏を同一人物とする見解が示されていた。しかし、家貞は「二郎」を仮名としている。「三郎」を仮名とした宗氏と「二郎」

を仮名とした家貞とは別人ということになる。一つの可能性であるが、家貞は『尊卑分脈』にもあるように早世して、未だ幼い高経へ家督を繋ぐピンチヒッターとして宗氏が存在したのではないか、ということが浮かび上がってくる。<sup>註10</sup>

いずれにしても近年、木下聡氏が「斯波氏の動向と系譜」の論考で指摘されているように、「鎌倉期の斯波氏当主は、みな生没年不詳で、家氏以外は動向もほとんど不明」<sup>註11</sup>なのが現状である。史料の少ない鎌倉期足利氏研究にとって、本五輪塔が貴重な発見となったことを強調したい。



図版1  
足利斯波氏略系図  
（『尊卑分脈』を元に作成）

#### 四、金剛三昧院多宝塔の再検討

次に、金剛三昧院の寺院としての性格について、足利宗氏の五輪塔発見に関連して考察してみたい。従来の研究では金剛三昧院の性格について、高野入道覚智とも称された鎌倉幕府の有力御家人の安達景盛が注目されてきた。北条政子の命により金剛三昧院の建立奉行として活躍したのが景盛であり、同院の研究は、いわば政治史上の考察が目立っていた。

もちろん、金剛三昧院の性格を考察するには当然のことであるが、高野山における寺院建立の目的の第一は、遁世者によるものと、故人の供養的側面からの寺院建立の二つの面があることを見逃すことはできない。

つまり、寺院建立には信仰的側面からの考察が重要であるにも関わらず、これまでの金剛三昧院研究では、この面について等閑視されていたことは否めない。金剛三昧院の建立については、それより以前に禅定院と称する寺院が高野山に建立されていたとされている。同寺院が廢転したために建立されたのが、金剛三昧院であった。このことの経緯については、『金剛三昧院文書』

の北条政子自筆書状とされる文書に、次のようにあることにより明らかである。以下、金剛三昧院文書は高野山文書刊行会の昭和十一年刊行『高野山文書』第五卷（「金剛三昧院文書」）によるが、引用の史料については『鎌倉遺文』に紹介のそれぞれの文書の積文も参考にした。

（史料2）北条政子自筆書状（金剛三昧院文書1）

このてら（寺）のことは、へつ（別）してゆいしよある事にて候、御ほたいしよ（菩提所）をなしく御きくわん所（祈願所）にて候か、すて（既）に一寺はいてん（廢転）たう（等）候へは返くもつたいなく候、一ゑんにこんかう三まいぬんへわたしつけられ候は、返くよるこひおほしめされ候へく候よし申へく候、心へ候て申せとて候、めて度かしく、

金剛三昧院の性格は菩提所であり祈願所であった。他方、北条泰時は以下のような、関東下知状を発給している。

（史料3）貞応三年（一二二三）九月十八日付関東下知状（金剛三昧院文書2）

可令早為高野山金剛三昧院并多寶御塔領筑前国粥田本新両庄事

右、件庄庄、可為彼寺領之状、依仰下知如件、

貞應三年九月十八日

（北条泰時）  
武藏守平（花押）

この下知状にある「多寶御塔」とは、現在も金剛三昧院の境内に残る国宝の建築物の多宝塔か否か、明確にはできない。現在金剛三昧院に立つ多宝塔（昭和二十七年十一月に国宝に指定）は、これまで幾度か修理されている。直近の修復は平成二十二年で、その前が昭和四十三年から同四十四年のことであった。この昭和の修理についての報告書は、『重要文化財金剛三昧院客殿及び

台所、四所明神社、多宝塔修理工事報告書（昭和四十四年九月刊、財団法人高野山文化財保存会発行）として公表されている。さらに、それより以前の明治四十年（一九〇七）にも金剛三昧院の多宝塔は修復されている。その修復の詳細は分らないが、当時の新聞記事には同塔にて「源頼朝の遺骨」との報告がなされている。<sup>註4</sup>金剛三昧院多宝塔の心柱の下から、源頼朝の遺骨が発見されたという記事である。これは、一次史料ではなく、二次・三次史料ではあるが、金剛三昧院の現状の多宝塔が、源頼朝を祀り供養する、いわゆる墳墓堂であった可能性が出てきた。

なお近年、井原今朝男・峰岸純夫の両氏は金剛三昧院の多宝塔について新たな説を立てられている。<sup>註5</sup>その両者の中でも、峰岸氏の論考を次に紹介する。峰岸氏は、安達景盛の最後の事業として、金剛三昧院多宝塔の建築があつたと位置づけられて、『金剛三昧院文書』の宝治二年（一二四八）四月六日付の大井朝光寄進状案と大井朝光書状案を史料として自説を展開なされた。本稿においても、この両文書を引用すると次のようになる。

（史料4）宝治二年（一二四八）四月六日付大井朝光寄進状案（金剛三昧院文書92）

寄進

伊賀国虎武保地頭職事

右、件所領者、承久勲功之賞宛給之地也、然而奉為故右大臣殿、御教養大忒尼依私宿願、建立高野山御塔一基、而間、為彼御塔仏性燈油、於虎武保地頭職者、限永代、所令寄進也、向後更不可有他妨之条如件、

宝治二年四月六日

<sup>大井</sup>源朝光在判

（史料5）宝治二年（一二四八）四月六日付大井朝光書状案（金剛三昧院文書93）

所蒙仰候御塔之間事、先度御返事令申子細候了、先彼御塔罷成御奉行候之条、殊以本望候、然者以伊賀国虎武保、可寄進彼御

塔之由、令申候了、而都鄙相隔候之間、若未被聞食候歟、仍書進寄進状候、以此所領、可然之様、御計候者、可為本意候、委細期後信候、恐々謹言、

宝治二

四月六日

(大井)  
源 朝光在判

謹上 (安達景盛)  
城入道殿

峰岸氏は、この二点の文書について金剛三昧院の「御塔」(多宝塔)の創建に関わるもので、信濃小笠原一族の大井朝光が御塔建立の奉行の一角を荷い、承久の乱の勲功で獲得した伊賀国虎武保地頭職の寄進を、高野山にあつて造立事業を遂行している安達景盛に伝える書状と寄進状であるとされた。

さらに、峰岸氏は文書の中で、御塔を建立する目的が「故右大臣殿(源実朝)の奉為」で、建立者の名と趣旨が「御教養大弑尼、私の宿願」とあることに注目されて、その御教養大弑尼を加賀美信濃守遠光の息女で、文治四年(一一八八)頼家の教育係として鎌倉に参上して頼朝に拝謁して、大弑局の名を与えられた人物と比定された。建久三年(一一九二)に実朝が誕生すると大弑局は他の2人の局とともに、教育係の女房となっていることを峰岸氏は明らかにされ、次のように金剛三昧院の多宝塔が建設されるまでの経緯をまとめられた。この峰岸氏の論考は重要で、金剛三昧院の多宝塔建立の背景が見事に明らかになされている。

大弑尼の父加賀美遠光は、義光系源氏で所有の甲斐国巨摩郡加賀美を称しているが、信濃国小笠原荘にも所領を持ち、その子長清(大弑局の兄弟)は小笠原氏を称した。長清の子息は長経(小笠原)、時長(小笠原・仁科)、朝光(大井)の三人で、信濃佐久郡を名字とする朝光は大弑尼の甥に当たる。(中略)

文書(本稿史料5)の宛書には「城入道」(安達景盛)とあり、景盛と協同して大弑尼が小笠原一族の支援を得て多宝塔の建立に尽くしたことが知られる。宝治二年(一二四八)実朝の没後三〇年を前にしてその供養のための多宝塔を金剛三昧院に造

立するという大弑尼の提起を受け覚智はその造立に最後の力を傾けた。この多宝塔は安達氏と小笠原氏の連携の所産であった。（註1）

ただ、鎌倉時代の金剛三昧院においては、多宝塔は二基存在したことを次に紹介したい。それを証明する史料が、弘安四年（一二八一）北条時宗発給の「関東下知状案」（註12）である。同文書の冒頭部分を次に挙げると、金剛三昧院の堂塔は、

（史料6）弘安四年（一二八一）三月二十一日付関東下知状案（金剛三昧院文書57）

堂二字（供料、行法）、塔二基（供料、行法）、護摩堂二字（供料、護摩）、経蔵一字、鐘楼一字、鎮守社一字（供料、行法）（以下、略）

と記している。同下知状案ではさらに、「賀州虎武保（南塔、所有）」と明記する。まさに、峰岸氏が指摘する多宝塔とは「南塔」と称された塔のことであった。

この峰岸氏の研究により、南塔の多宝塔が源実朝のために造立された背景が明示されたことは貴重である。おそらくは、実朝の遺骨が奉納された可能性もあり、今に残る多宝塔が頼朝の墳墓堂であった可能性が出て来た現状では、南塔の多宝塔が実朝の墳墓堂であったことが考えられる。二基ある多宝塔の内、一基が源頼朝のため、もう一基がその子源実朝のために建設された墳墓堂であった可能性を指摘したい。

この点について、嘉元二年（一一三〇）から同三年（一一三〇）に成立した無住の著作による『雑談集』巻之第六の記述が、まずは参考となる。同書には「金剛三昧院ニ、大臣殿墓所トシテ、遺骨ナド、ヲサメ寺ニ成ケレ」とする。金剛三昧院は源実朝の遺骨が納められた「墓所」であったことを明記している。（註13）無住が金剛三昧院のことを「墓所（むしよ）」と称していたことは、本稿が問題提起する点と符合する。

さらに、『帝王編年記』の文暦元年（一二三四）の条には、「今年。鎌倉二品禪尼（頼朝、御後室）、為ニ故右大臣・高野山内建三立金剛三昧院」。奉行城入道大連（盛長々子、俗名景盛）。本尊正観世音。御身被籠「実朝公遺骨」。云々」と記す。『雑談集』と『帝王編年記』は

共に、実朝の遺骨が金剛三昧院へ納骨されたことを記している。特に『帝王編年記』には、金剛三昧院の本尊が正観世音として、その本尊に北条政子が実朝の遺骨を納めたとする。

ちなみに、鎌倉時代末期の高野山上の塔頭寺院や堂塔の由緒を信堅（一二五九〜一三二二）が著した『信堅院号帳』には、金剛三昧院のことを「実朝大臣殿他界之後其御母儀二位二品禪尼之建立也。奉行大蓮房。三代將軍之御菩提所也。本堂觀音実朝大臣殿之御本尊雲慶之作也」と記している。<sup>註15</sup>

この金剛三昧院と源実朝について注目された研究者として、角田文衛氏が挙げられる。角田氏は「実朝の首」の論考を公にされて、金剛三昧院における実朝の納骨は遺骨ではなく「鬢髪」が納められた可能性が多いとされた。<sup>註16</sup>

金剛三昧院の南塔造立より前の嘉禎三年（一二三七）、足利義氏は伯母にあたる北条政子の十三回忌に際し金剛三昧院において追善を修して、一丈八尺五寸の巨大な大日如来像を安置する大仏殿を建立した。その大仏殿には、北条政子と実朝の遺骨が納められた。この大仏殿も、北条政子と実朝の墳墓堂としての性格があったことが指摘される。その史料の足利義氏寄進状案を以下に挙げる。

（史料7）嘉禎四年（一二三八）三月二十五日付足利義氏寄進状案（金剛三昧院文書59）

高野山金剛三昧院内大仏殿

寄進 所領壹所

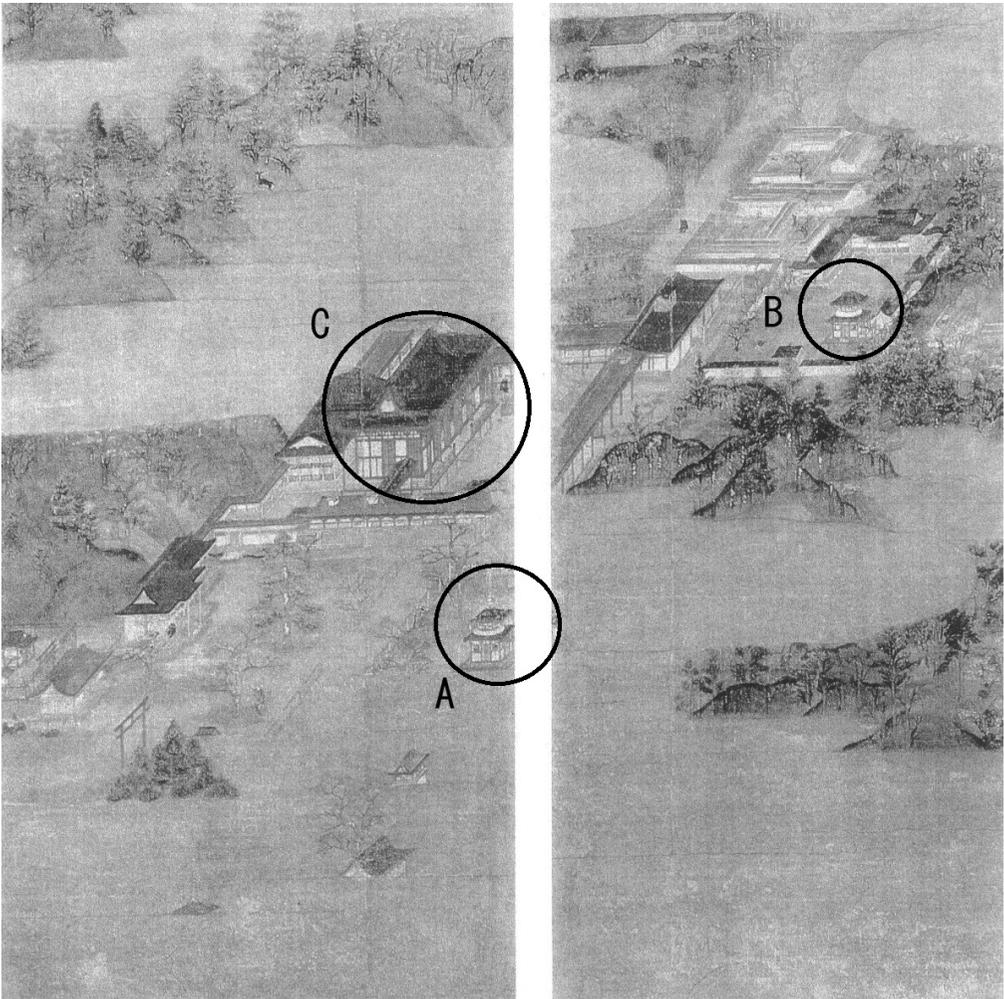
在美作国大原保

右大仏殿者、相当故二品禪定比丘尼聖靈十三之忌辰、所被建立也、仍為彼報恩、奉造立丈六尺大日如来像<sup>一丈八尺五寸</sup>、安置之彼院内者、奉納故 右府大將軍、并禪定比丘尼之遺骨（以下、略）

鎌倉時代後期の高野山を描いた古絵図として今に残るのは、旧金剛三昧院蔵の六曲一双の高野山山水屏風（国指定重要文化財）がある。本屏風は堂本印象の所蔵を経た後、現在は京都国立博物館所蔵となっている。

この高野山古絵図の金剛三昧院を描いたとされるのが右隻の第六扇・第五扇の下方であるが、確かに南方に多宝塔の形状をした塔が一基と、その上部にもう一基同様の多宝塔の形状をした塔が立っている。「南塔」ともう一方の塔とは区別した呼称をした塔名をする点からしても、複数の塔が存在したことを示している。位置的には、南塔は現状の本堂よりさらに南方の奥に入った所で、もう一つの塔は今立っている国宝の多宝塔附近であり、大仏殿は現在の本堂付近であろうか。これらのことを同古絵図に落とすと、図版2のようになる。Aが南塔（多宝塔）、Bが今に残る多宝塔が立つ地点、Cが大仏殿である。

鎌倉時代末期の元徳二年（一三三〇）八月十九日、金剛三昧院は庫院の出火で回祿してしまったと伝えている。<sup>（註1）</sup>そのため、今に立つ多宝塔が南塔なのか、あるいは南塔ではなくて他方の塔なのかは未詳としかいえない。ただ、上記で紹介したように、現状の多宝塔から源頼朝の遺骨が出土したことを信じるなら、現状の多宝塔は南塔ではなく、もう一つの方の多宝塔といえる。



図版2 「高野山山水屏風」に見える金剛三昧院の堂塔  
(日野西眞定編著『高野山古絵図集成』より転載)  
Aが南塔(多宝塔)、Bが今に残る多宝塔が立つ地点、Cが大仏殿と推定。

## 五 おわりに

以上、高野山金剛三昧院の堂塔の一つひとつは、源氏一門の墳墓堂であったことが指摘される。このことは、高野山金剛三昧院の寺院としての性格の一面を今に伝えている。

足利氏と金剛三昧院については、原田正俊氏の論考が挙げられる。同氏は「足利氏にとって金剛三昧院は曩祖足利義氏が美作国大原保を金剛三昧院大仏殿領として寄進して以来の因縁があり」とされて、足利尊氏以降の足利將軍家の納骨場が金剛三昧院の支院の安養院であり、「金剛三昧院自体がその場になり得なかったのは、鎌倉幕府源氏三代將軍の菩提所、源実朝や北条政子の遺骨安置の場として機能していたことを憚り、安養院が選ばれたといえよう」と論じられている。<sup>註15</sup> 原田氏が触れられている「安養院」とは、意教上人頼賢が中興したと伝える金剛三昧院の支院である。同院は現在も法灯を伝えていて、高野山内の今に残る一一七ヶ寺の塔頭寺院の一つである。現在、安養院が建立されている場所は、金剛三昧院から二五〇m程北方の地である。

しかし、今回足利宗氏の五輪塔が発見されたことにより、この原田説も訂正せざるを得ないものと考えられる。原田氏がいう「憚り」という面は少なくともないのではなからうか。足利氏の直系でない足利宗氏が、自身の納骨を伴った五輪塔を金剛三昧院に造立した事実は、今回明白となった。むしろ、足利將軍家にとっては、開幕に際して新たな宿坊として金剛三昧院につらなる同院支院の安養院を納骨場としたと解釈される。

鎌倉時代を通じた金剛三昧院の性格は、「足利氏を含めた広義の源氏一門の祖霊を祀る寺院」ではなかったろうか。金剛三昧院と足利氏の納骨に伴う関係性の淵源は、既に鎌倉時代からあったことを、本稿で主張したい。

平成二十年から始まった、金剛三昧院客殿の解体修理の際に礎石から元亨元年（一三二一）在銘の五輪塔地輪と、同じく鎌倉時代の無銘五輪塔地輪が見出された。<sup>註16</sup> 元亨元年（一三二一）の銘文を紹介すると以下のようである。写真6はその銘文の面の写真で、写真7はその礎石に転用されていた二基の五輪塔地輪である。奥が元亨元年（一三二一）の在銘品で、手前が無銘品である。両者の形状は酷似していて同一タイプであり、造立されたのも同時期と推定される。

為待三會之曉

卜居於高野山

造立供養斯

元亨改元  
西辛

三月廿一日沙弥契明

上：写真6  
元亨元年（1331）五輪塔地輪の銘文の面

下：写真7  
金剛三昧院礎石転用の2基の五輪塔地輪  
手前が無銘で、奥の五輪塔地輪が元亨元年  
（1331）銘の遺物



銘文の詳細な検証については（註19）の拙稿を参照して頂きたいが、「契明」と名乗る在俗出家者が逆修供養をして、五十六億七千万年後の弥勒菩薩の当来を待つて五輪塔を造立したものである。空海が入定した日の三月二十一日に造立されている。高野山における鎌倉時代の有紀年銘の石塔は、町石以外では六十二基が見出されているが、<sup>（註20）</sup>一個人がこれ程の五輪塔を造立するケースは少なく、「契明」は本稿で紹介の足利宗氏と同様に、当時において相当の身分の人物であった可能性がある。

また、今回発見となった金剛三昧院の先師墓には、紹介した足利宗氏の五輪塔の他に、鎌倉時代から南北朝時代の古遺品と見られる五輪塔や宝篋印塔の残欠品が十点程見出された。<sup>〔註11〕</sup> これらの詳細な調査報告については、順次発表を予定しているが、いずれにしても、金剛三昧院の地中には「源氏一門の墓所」としての鎌倉時代から南北朝時代の石塔が、未だ多数土中に埋蔵されているものと推察される。将来のさらなる発見を期したい。

〔註1〕 木下浩良「高野山の石造物」『高野町史 民俗編』（二〇一二年刊 高野町）所収。

〔註2〕 木下浩良「尼妙波房の供養塔について―高野山における鎌倉期五輪塔の一遺例―」『密教学会報』第二十七号（一九八八年刊 高野山大学密教学会）所収。

〔註3〕 『和歌山県文化財学術調査報告書第六冊 高野山奥之院の地寶』（一九七五年刊 和歌山県教育委員会・高野山文化財保存会）。

〔註4〕 榎英雄・愛甲昇寛「高野山奥院出土の石造遺品」『國学院雑誌』六十七巻九号（一九六六年刊 國学院大學）所収。

〔註5〕 小川信「守護大名斯波氏の発祥」『国史学』八十六号（一九七一年刊 国史学会）所収。後に小川信『足利一門守護発展史の研究』（一九八〇年刊 吉川弘文館）に再録。

〔註6〕 『師守記』貞治六年（一二三六七）七月の条に（一九七六年刊 続群書類従完成会『史料纂集 師守記第十』）、「今晝寅剋入道修理大夫源高經（從四位下、他界、稱六十三、稱六十五）とあり、享年六十三から逆算すると、生年は嘉元三年（一二三五）となる。

〔註7〕 この点については、坂口太郎氏の示教による。

〔註8〕 木下聡「斯波氏の動向と系譜」『シリーズ・室町幕府の研究 第一巻 管領斯波氏』（木下聡編著 二〇一五年刊 戎光祥出版）所収。

〔註9〕 『六大新報』二〇七号（一九〇七年刊 六大新報社）で、以下のように記載されている。「金剛三昧院多宝塔（特別保護建造物）修繕工事に進捗し本月中に竣功の筈なりとぞ。右工事に際し心柱の下より源頼朝の遺骨発見せしとぞ」。

〔註10〕 井原今朝男「小笠原遠光・長清一門による將軍家菩提供養」『金沢文庫研究』第三二〇号（二〇〇八年刊 金沢文庫）所収。

峰岸純夫「鎌倉時代における安達氏と小笠原氏の連携―女性と寺社の視点から―」『近藤義雄先生卒寿記念論集』（二〇一〇年刊 群馬県文化事業振興会）所収。

〔註11〕 峰岸純夫前掲論文三〇二頁〜三〇三頁。

〔註12〕 同文書名は、その末尾の書き留め文言が「依鎌倉殿仰下知如件」であるので、「関東下知状案」が正しい。この点については、山野龍太郎「北条時宗発給文書目録」『北条氏発給文書の研究』北条氏研究会編著 二〇一九年刊 勉誠出版）を参照した。同文書名について『鎌倉遺文』では「関東御教書」とし、『群馬県史 資料編6』（一九八四年刊 群馬県）では「金剛三昧院草創留書」とする。確かに、同文書は金剛三昧院の来歴

等を記したもので、北条時宗がその事を認めて記したと思われる部分<sup>(北条時宗)</sup>は同文書の最後の三行の「金剛三昧院事、寺家任申請向後不可有相違者、依鎌倉殿仰下知如件、相模守平朝臣在判」だけである(坂口太郎氏御教示)。

(註13) 『雑談集』(山田昭全・三木紀人編校 一九七三年刊 三弥井書店)。

(註14) 『帝王編年記』(『国史大系』第十二卷所収)。

(註15) 『信堅院号帳』(『統真言宗全書』第四十一 所収 一九八七年刊 統真言宗全書刊行会)。

(註16) 角田文衛「実朝の首」『平安の春』(角田文衛著 一九八三年刊 朝日新聞社) 所収。

(註17) 「金剛三昧院住持次第」(金剛三昧院文書三七九)。

(註18) 原田正俊「室町幕府と高野山金剛三昧院―禅律系寺院の在り方―」『中世の寺院体制と社会』(二〇〇二年刊 吉川弘文館) 所収。

(註19) 木下浩良「高野山金剛三昧院の礎石転用五輪塔と転用の意義について」『密教学会報』五十三号(二〇一五年刊 高野山大学密教学会) 所収。

木下浩良「砥石・石段へ転用の高野山の石塔と転用の意義について」『史迹と美術』八八六号(二〇一八年刊 史迹美術同攻会) 所収。

(註20) (註1)に同じ。

(註21) 金剛三昧院先師墓の無縁塔の中世の石塔調査に際しては、高野七口再生保存会会員の入谷和也・城戸良幸・木ノ本豊・児玉康宏・辻田友紀・中澤初美・濱田陽吉・福井規雄・松下喜美子・森下稔の各氏の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

(付記) 本稿校正の段階で、坂口太郎氏から有益な助言を得た。記して感謝の意を表したい。

キーワード：高野山 足利宗氏 金剛三昧院 五輪塔 源氏一門墓所